

2019年
8月号
NO.0084

カトリック笹丘教会 教会ニュース

福岡市中央区笹丘1-16-1
Tel761-4504 fax761-4524
広報委員会

福岡教区 2019年の目標 「信じる喜びから伝える喜びへ」

暑中お見舞い申し上げます



主任司祭 遠山満

皆様、暑中お見舞い申し上げます。熱中症などに罹られませんように。お互いに暑さ対策を十分にしながら、この夏を乗り越えて参りましょう。

ただ、冬の寒さならば、温めれば良いのですが、夏の暑さは、どうしようもないことがあります。このような時、どのように、この暑さに対処して行けば良いのでしょうか。

一つは、暑さ=悪い事、という考え方を改める事だと思います。私たちは何処かしら、暑い事は悪い事という風に考えてしまいがちです。先日、台風が九州に上陸した日、台風が収まり始めた夕方、洗濯をしました。洗濯物は、二回分ありました。一回目の分に関して、洗濯した後、室内の物干しに掛ける事が出来ましたが、二回目の分については、洗濯したものの、物干しに掛ける時間がなく、洗濯機の中で夜を過ごしてもらう事となりました。翌朝、二回目に洗濯した洗濯物を、一回目の洗濯物と一緒に干そうとしたのですが、何と一回目の洗濯物は、その時、既に乾いていました。私は、驚き、このような暑さを下さった神様に感謝しました。

もう一つ、この暑さを、何かに利用できないか、その方法を探る事です。以下はあるシスターの伝記の中に記された、彼女の祖父との間で起こった出来事です。

「ある日、ベティーナは、祖父が日照りの中、畑で働いているのを知って、冷たい水を汲み、祖父が喜ぶ事を期待して祖父に届けに行く。すると何故か祖父はにっこりして笑って一言、『ありがとう』と言うと、飲む真似をして水差しを口まで運んでから、水を地面に流してしまう。がっかりしたベティーナは悲しそうに家に帰り、自分の愛が裏切られた事で腹を立てていたが、夕方祖父が彼女を傍に呼び、笑いながら、「おじいちゃんに怒っているんだね」と言う。「何故？おじいちゃんの為に、あんなに遠くまで行って冷たい水を汲んで来たんだよ。でも、おじいちゃんは、その水を飲まないでこぼしてしまった」。祖父は次のように答えた。「いいかい、ベティーナ、私は朝の4時から一滴も水を飲まないで麦刈りをしていたから、すごく喉が渇いていた。でもね、煉獄の靈魂たちは、それより長い間苦しんでいる。だから私は、その人たちに水をあげたかった」。

私たちの生活の中で、苦しみを出来るだけ小さくするように、工夫する事は大切です。と同時に、どうしようもない苦しみもあります。そのような時、まず、その苦しみを受け入れる事ができるように祈りましょう。次に、その状況を感じましょう。何故なら、私たちの視点の届かない所で、神様が善を行って下さっているはずですから。三番目に、その状況を通して、神様の栄光が現れますように祈りましょう。何故なら、神様は、私たちが捧げるその状況を、他の人の救いに繋げて下さるからです。



~~~~ 信仰のルーツ ~~~~

『私の先祖 私を創ってくれた人のルーツを語る』

—— その12 最終回 ——



今年の7月28日、私は夏の甲子園長崎県大会の決勝戦を観るために、バックの中に父の写真を入れ、長崎の県営野球場に向かった。結果は10対1で海星高校が勝ち、甲子園へ行くこととなった。試合終了直後に歓喜する選手達を見ながら、私の目にも自然に涙が滲んだ。そして「良かったね、今年も海星が甲子園に行くよ」と父に語りかけた。

確か私が中学生の頃、海星が甲子園で大活躍したことがあった。「サッシー」こと豪腕の酒井投手の活躍で、あれよあれよと言う間に海星は勝ち上がっていった。父は「決勝までいったら、おいは甲子園に応援に行くぞ!」と興奮していた。しかし、準決勝で惜しくも海星は負け、父はショックのあまり布団を被ってふて寝していたのを、私はよく覚えている。

父は最後まで海星で学びたかったのだ、仲間達と野球がしたかったのだ、しかし、思いがけず原爆でその夢が絶たれた。

私の母の姉は、被爆当時15歳で、長崎大学病院の看護学生だった。被爆直後、母方の祖父と長兄は彼女の行方を捜すため、大学病院周辺を彷徨った。ある看護婦さんの「娘さんは看護婦寮にいたはずです」とのことばをもとに、その周辺を捜した。しかし瓦礫と焼けて炭化した遺体ばかりで、叔母の行方はわからなかった。看護婦寮付近にあった焼けて性別もわからない3体の遺体から一部ずつを取り、墓に納めた。

今回自身のルーツを鑑みながら、不思議な気持ちになった。先祖達のが260年間命がけで信仰を護ってきた。その後浦上四番崩れなどの犠牲を経て、信仰の自由が許され、ド・ロ神父様が長崎に来た。神父様はフランス貴族の出身だった。神父様の父か祖父がフランス革命を経験し

「これからは貴族というだけでは生きてはいけない。貴族でも生きていけるように、相応の技術を身につけておかななくてははいけない」と子孫達にあらゆる知識や技術を学ばせた。パリミッションに入会し司祭となり日本に派遣されたド・ロ神父様は、赴任地の外海の信者達に私財を投じてあらゆる農耕器具や土地を購入し、自ら先頭に立ち信者達に開拓の術を与えた。

私はぼんやり考える。もし先祖が外海地方に住む信者でなかったら。もしド・ロ神父様がフランス貴族ではなかったら。もしフランス革命が起きなかったら。もしマリー・アントワネットがフランスに嫁がなかったら……。考えると果てしない。

東洋の果ての日本という国の、小さな小さな地域に細々と生きていた先祖が、自分達の存在がどれほど子孫達や世界に貢献してきたかを思うと、どんな適切な感謝のことばも思いつかない。

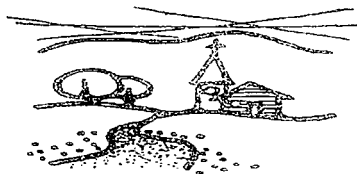
今回長きに亘って私のルーツの話を掲載させていただきました。個人的な話でしたので、あまり（まったく）面白くないと思われた方も多いと思います。お許してください。

私の先祖の話は尽きません。当然私と同じように信者の皆さんそれぞれに歴史があると思います。そのことを心に留めながら、これからも先祖達に恥じないような人生を送っていきたいと思います。

皆さま、ほんとうに、ほんとうに、ありがとうございました。

カトリック笹丘教会信徒

藤渕みどり



博多にきんしゃ〜い6

歓迎納涼祭 in 笹丘教会を終えて 感謝、感謝。



去る8月2日に「博多にきんしゃ〜い6(8/2~8/5)」の歓迎納涼祭が当教会にて行われた。当初「きんしゃ〜い6」の実行委員会から歓迎納涼祭を笹丘教会で開催できないかとの相談があった時、平日(金曜日)でもあり準備のための協力者がどれくらい集まっていたのか等引き受けるにあたっては多少の不安があった。しかし、笹丘で納涼祭をやれば福島の子どもたちとの交流ができること、福島にずっと寄り添っている実行委員会のみなさんの熱い思いにも触れることができるのではないかと考えて、遠山主任神父様とも相談し快諾を得たので、役員会に提案し了承を得、開催することになった。当日は当教会の方々はもちろん、他の教会のたくさんの方々も暑さの中準備を手伝ってくださった。

福島から来た小学生15名は初日でまだ硬さがあったが、女の子は浴衣に着替え歓迎納涼



祭に参加した。BBQ、ソーメン流し、かき氷、でお腹を満たし、ゲームコーナーで遊んだ後、聖堂での「タベのつどい」に臨んだ。教会、聖堂が初めての子どももいたはずだ。聖堂で今回の3泊4日の「きんしゃ〜い6」での目標等の発表や森山神父様のお話を聞き、全員で記念撮影をし、花火で納涼祭を終え宿舎

の大濠会館へ向かった。

震災当時2才~4才。震災の記憶は定かではないだろうが、「きんしゃ〜い」はきっと彼らの記憶に残ることだろう。避難せずに福島に残った家族、いろんな葛藤があった、いや今でもあることだろう。一方避難する決意をし、各地にばらばらになった家族の訴訟を支援しながら、その家族の生の声を聴くと震災と原発事故の残した傷跡の大きさ、深さに改めて心を痛める。

9月1日「被造物を大切にす世界祈願日」を迎える。自然と調和した歩みを進めたいと思う。暑い中、「きんしゃ〜い6」への皆さんの協力、本当にありがとうございました。

編集後記

子供の頃から家の本棚にあった、「マリアさま」(女子パウロ会)。素朴で色鮮やかな挿し絵と共に、マリア様の幼少から被昇天までの一生が綴られている。

先日書店で同じ著者の「キリストさま」と共に、2冊並べて置いてあるのを見てとても嬉しく思った。

「キリストさま」は以前から子供のお気に入りだが、どちらも同じくらい大切にしたいと思っている。マリア様を通して、マリア様と共に、完全にイエス様のものとなれます様にと願いながら。(A.S)

